

---

# 橘くん家の死神ちゃん

UZ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

橋くん家の死神ちゃん

### 【Zコード】

Z0390Y

### 【作者名】

UN

### 【あらすじ】

橋秀一はある日突然、偶然と勘違いによって死神と名乗る少女に殺された……はずだった。目を覚ませば生きてはいるものの、どうにも死に易い体質になってしまつ。これは即死体質の少年と天然な死神の少女が描くコメディカルストーリー。

朝。

俺はいつもの時間帯に起き、朝食を作っている。  
フライパンに油を差し、玉玉焼きのタマゴを冷蔵庫から取り出す。  
いつものように朝食を作るはずだというのに、少しだけでも変化  
が訪れるとなにかとかつてが違つてくる。  
まるで間違い探しのようだ。

いつもなら玉玉焼きに使うタマゴは一個のはず。  
だといふのに、取り出すのは二個。  
なんでかわかるだらうか？

答えは簡単だ。

一人分、食い扶ちが増えたと言う理由だ。

カツ、コン、カツ、コン。

なんとなくリズムのよい音が聞こえてくる。  
キッチンから居間を見れば、そこには茶碗と箸といつ樂器を使用  
して演奏をする少女。

ただ、箸で茶碗を叩くだけだとこの辺に何気ない音を奏でてい  
るのは「」愛嬌。

そんな演奏をする少女こそ食い扶ちが増えた原因である。

一週間前なら、いつもは静かなものでちよつとばかり寂しかった  
光景もなつかしいものだ。

ふと、少女と田が会う。

食器で演奏をする少女と田が会うと決まつていつ頃。

「ねえ、ゴハンまだー？」

「いま、作ってる。まづいよー待つとくれ

そこで茶碗を叩くリズムが8ビートから16ビートへと変化する。  
何気に上手い。

「はいはい、急ぐから静かに待つてなさい」

けれど、リズムが速くなつたからと言つて朝食のできる時間は早  
くなるわけではない。

俺はいつも通りの感覚で朝食を作るだけだ。

急ぐと言つのは気持ちだけ。

けれど家の同居人は我慢弱い。

「しゅーすけー、まだー？」

「まだだ」

急ぐと言つて10秒だ。

10秒しか待つてくれなかつたのだ。

人としてどうだらうか？

普通なら5分くらいは待つてくれるだらう。

よく漫画やアニメで起こされるとき「後、五分」という言葉が何  
気なく覚えている。

タイトルは覚えてないけど、そのシーンだけは覚えてるから不思  
議だ。

と、思考していたが、改めて思い直すとアレは人ではなかつた。  
なら人としての常識など問うても無駄か。

「死神はねー、お腹一杯食べないと死んじゃうんだよー」

「なんだよ。そのウサギは寂しいと死んじゃうみたいな言い方は

タイミングよく少女は自身の正体を口にしていた。  
まあ、他が聞けば痛い人扱いされかねないが……。

彼女はと言つと、死神と言つ存在らしい。

死神については知らないことだらけだが、お腹一杯食べなくとも  
死なないと言つことだけは知つてゐる。

それがこの橘家に一週間ほど前から居候中のアヤメと言つ少女だ。

## 001 桜並木にて

（一週間前）

陽気な気温の暖かさに桜が咲き乱れる季節。  
それは進学、入学のシーズンだ。

新しい学校や新しいクラスなど。  
皆、心を躍らせたりするだろう。

かく言う俺も去年は新しい学校の新しい生活に胸を躍らせたりして  
いた。

まあ、今回俺の場合は進学であり去年ほどの期待はない。

私立水森高校指定の制服を着て、さうに指定された鞄を片手に桜並木の通りを歩いていく。

左右に咲き誇る桜が爽快だ。

ここにレジャーシートを敷いて花見もできるだろう。

ただ、通行人の迷惑になるということを除けばだが……。

そんな中、タツタツと走るような音が聞こえる。

「せんぱーい！」

聞き覚えがある声。

振り向けば見知った顔の人物だ。

「ああ、美春か……」

俺よりも身長が150cmぐらい小さじ少女、吉沢美春。

家が近所のため小学校からの知り合い……だつたけ？

まあ、知り合いである。

そんな美春は今、俺と同じ学校である水森高校指定の制服を着ている。

「あー、美春も今年からウチと同じ学校だつける  
「そなんですよー。えへへ、どうです先輩？」

クルリ……と一回りして制服姿をアピールしてきた。  
だから俺はサムズアップして……。

「うん、凄く似合つてるぞ！　どこから、どう見ても立派な中学生だ！」

「むー先輩、私は高校生です！　それに先輩のとこの制服を着てますよ」

恨めがましい視線が突き刺さる。

どこかで視線で人を殺せると聞いたことがあるが、コイツの視線では植物プランクトンを殺すので精一杯だろう。

一言で言えば『微笑ましい』。

「はは、[冗談だよ]冗談。どこからどう見ても飛び級で入学した高校生だ！」

「むうつ……」

視線がより強みを増してきた。

だが、この程度ではまだまだ。

ちなみに飛び級で高校の編入は法律では無理だ。

生徒は平等に扱わなければならぬことこの觀点から禁止されてい  
る。

なるなら、大学や大学院だな。

つと、そろそろ本当に謝らないとまずいな。

前にからかい過ぎて、当分口を聞いてもらえなかつたことがある。

「悪い悪い、これも冗談だよ。ちゃんと高校生に見えるよ」

と、謝罪をする。

けれど美春はぶいと、ソッポを向けて……。

「ふん、だ！ 先輩なんて辻斬りに合えばいいんです

「何故、辻斬り？」

辻斬りとは無差別に通行人を刀で斬ることだ。

理由としては刀の切れ味を実証するための試し斬りや、単なる豪  
爽晴らし、金品目的、自分の武芸の腕を試す為など。

現在は銃砲刀剣類所持等取締法という法律が存在するため刀で斬  
られることは、まずないだろう。

やられるとしてはナイフか包丁……せいぜい、通り魔だろう。

と、思考しているもこれつて遠まわしの死の宣告か？  
まあいいな。本当に怒つてうつしやる。

「あー、すまん。本当に悪かった

少しばかり罪悪感。

今度は頭を下げる謝罪だ。

すると、美春は無言のまま俺の元へと歩み寄り。

「が、あつー？」

突然、顔面に謎の衝撃！？

ほんの数cmだけ宙を浮いては地面へと落下しゆく。  
それは、まるでボクシングで強烈な右ストレートを喰らつてしま  
ングへとダウンするような選手のよくな。

地面へ落下しゆく俺はそのとき見た。

俺の顔があつた位置にまで右腕を伸ばしきった美春の姿を。

普通、女の子がグーで人を殴るか？

「ぐへッ！—」

そして「コン」マ2秒。

地面へと落下。

大の字で道路へと倒れ伏せる俺があつた。  
体を起こすと美春が近づいてきて。

「まだちょっとイラッときますけど、これで許してあげます

たしかにちょっと表情が固いよくな気がする。  
いや……けど、さすがに暴力はいけないと聞いたみたいのだが

「……はー」

正直言つて、今の美春には言い返せません。  
怖すぎます。

今日の教訓。

女の人は怒ると怖いので決して怒らせないようにしてましょう。

そんなフレーズが俺の頭の中で流れたのであった。

## 002 騒がしいクラスメイト

桜並木の通りで美春からプロボクサー級のストレートを喰らってから10分。

なんとか斜めにまで、機嫌を直した美春とともに学校へと登校をして行つた。

そういえば……子ども扱いとかされるの嫌つてつけな美春は……。  
それよりも、あの不機嫌解消の後でまだ機嫌が斜めつて……。  
なんだろうか……もはや傾くというよりもひっくり返つたのだろうか？

多分だが、機嫌が悪いのを45度とすれば、おそらく315度くらいか？

昇降口で美春と別れた後、俺はそんなことを考えていた。  
それと、あのストレートを『美春ストレート』と名付けた。  
格ゲーならゲージ消費の大技だ。

さて、そんなかんやで教室へと辿りつく。

春休みの登校日以降、久しい上新しい教室なのだが、クラスはあまり変わつていないから残念だ。

そんなとき一人のクラスメイトが声をかけてきた。

「おお、橘か待つてたぞ！」  
「ああ久瀬か、久しぶりだな」

声をかけてきた人物の名は久瀬栄士郎。  
高校に入つてすぐに知り合つた友人である。

「そんなことより聞いてくれ。スクープだ！ セツキ聞いた話なんだがな、入学生の一人に凄い女子がいるらしいんだ」「へえ……そうか」

別段、そこまで興味はないけど合槌を打つ。

ちなみにコイツは黙つていればクールで知的な眼鏡キャラに見えなくもないが、本性はちょっとばかし頭のネジが飛んだ熱血系の報道馬鹿だ。

1年で新聞部を設立しては今その部長をしている。

久瀬は、俺の返事がなんであれ話の続きを話のあいだ。それはこの1年で経験済みだ。

「なんでも今朝、桜並木の通りで男子一名を拳一発でダウンさせたそうだ！」

「つー？」

待て？

桜並木……拳……男子一名をダウン？

それって、美春のことじゃないか！？

そしてダウンさせられた男子つて俺だよー！？

それと一きなり噂になるなんて凄すぎです美春さん！

「と、言つわけで」これから取材に行つてくるぞ

「いや……始業式すら始まつていのに、上級生が下級生の教室に行くなんて前代未聞だぞ」

そう、さすがに問題というか嫌な噂が立ちそうだ。

それに上級生のイメージが悪くなる。

だが、久瀬は聞く耳もたずと言つた感じで……。

「だが、報道には関係ない！　聞いた話だと彼女の父親はプロボクサーだと言つ噂だ！」

「いえ……美春のお父さんは普通の会社員です。

ボクシングをやつていたとか聞いた覚えがあります。

と心の中でツッコンだところで伝わるはずもなく、以心伝心とか1年程度の関係では不可能だ。

「なーに、やつてんのよ？」

と、ここで一人の女子の声が聞こえた。

彼女は、吉沢理奈。騒がしいクラスを束ねる頼れる委員長だ。そして……苗字からわかるように、あの美春の姉である。

そんな委員長は久瀬の襟を掴んでは引き止める。

その際に首の負荷からか「ぐえ！？」なんて声が聞こえるが気にしない。

「クッ……離せ、委員長。俺はこれから取材として一年の教室に……」

「はあ！？　今から1年生の教室にってバカじゃないの？」

おつしやる通り……と俺は思った。

「いい、久瀬。まだ入学したばかりの1年生の教室にいきなり上級生が行くなんて怖がらせに行くような物よ。そうなればあんたの新

聞部の評判だつて悪くなるわ

「ぬう……それは困る」

そういうえば、現在新聞部は部員が先輩の卒業で3人だつたんだよな？

5人以上いないと部が成り立たない規則だし、ここで1年生が誰も入らなかつたら存命の危機か。

それなら評判を悪くするのは得策ではないな。

「くつ……致し方ない。取材は後日に延期することにしよう

そうブツブツ言いながら席に着いて行く。

俺も席に着くか……。

と、思つたら突如、襟を引っ張られた。

「ぐえ！？」

情けない声を出してしまつ。

気が付けば委員長が久瀬の襟を掴んだように今度は俺の襟を掴んでいた。

「そういうえば、秀一に聞いておきたいことがあるんだつだけ

「な、なんだ……？」

なんとなく予想はできてしまつ。

なんたつて、美春の姉なのだから。

「さつき美春と会つたんだけど、えらく不機嫌だつたのよね。秀一、

アンタ何があつたか知らないかしら？」

「ナ、ナシノコトデシヨウカ？」

まざい……つい声が裏返つてしまつた。

俺の同様ぶりに委員長の目付きが鋭くなる。

ちなみに、委員長は妹と違い視線でナウマン象すら殺して見せそ

うなほど鋭い。

ハヤシ 1900年春

とりあえず、俺は一切の抵抗を諦めた。

### 003 謎のロープの少女

「豆腐に卵……よし、揃つてるな」

学校の始業式を終えた後、俺は2週間に1回ぐらの確立でスパーに立ち寄る。

それも、一人暮らしを行なつてているためだ。

両親は一人とも海外で出張中。

そのため俺一人が国内に取り残されたのだ。  
まあ、俺の意思でもあるのだけど。

そういうわけで炊事は一通りできる。  
もつとも、昔……一人暮らしを始めた頃に美春にご馳走したのだが「まずいです」と言う一言で斬り捨てられたことは悲しかった。  
アレから必死になつて努力したのはいい思い出だ。

そうだな、今度またアッシュにご馳走してやるか。  
見返してやるためにもな！

と、考へてゐるながら俺はスーパーの袋を片手に帰宅して行く。  
今日は始業式だし半日だつたし、そのままスーパーに直行だつたから腹が減つたな。  
たしか夕飯の残りがあつたはず……。

「ん……なんだ、ありや？」

俺はそのまま道路を歩いていると向かい側に変な物を見つけた。

いや変な者が。

まるでファンタジーな世界から現代へと転移したかのよつた真つ黒いローブを着た人物が歩いてくる。

もつとも、ローブで顔が隠れているためどんな人物かはわからな  
い。

どこかで仮装大会でもあるのか？

それに、やけに背丈が小さい。  
中学生くらいだろうか？

まあ、あまり関わりたくないのが本音だ。  
このまま無関係にすれ違おうなんて思つたのも虚しく、そのローブの奴は俺に話しかけてきたのだ。

「ねえ……」

「な、なんだ？」

表情が見えない奴に声を掛けられるとか……酷く不気味だ。  
けれど、声は澄んだように綺麗な女の子の声だった。

「Jの辺にたちばなつて名前の人、知らない？」

なんだ、ただ家を尋ねて聞いてきただけか。  
あんな、格好だし変なことでも言つてくるのかと内心ひやひやした。

つて……たちばな？

「ああ……たちばなつて言つてもJの辺には色々とあるからな。俺

も橋たかはなだし……」

「え……？」

突然、ローブの少女から間の抜けたような声。俺、何か変なこと言つたか？

すると少女は踵を返す。まるで、彼女が探ししているたちばなという人物などもつ用がないかのよひに歩き出しき詰つぶやいた。

「そひ……貴方……だつたんだ」

その声は酷く悲しげだったのが印象に残った。なんで、悲しげだったのかはよくわからない。

けれど、俺はつい立ち止まり背を向けて歩く少女を見送った。そのまま少女は見えなくなつていく。

「なん、だつたんだ？」

俺は、そんな少女の毒氣に当たられてしまつたのかホウゼンと立ち尽くす。

それにしてもなんであんなに悲しげな声だつたんだろ？

ぐう……。

「うと、そひだ……昼飯まだだつたんだよな

けれど、腹の音で我に返ることができた。

なんとなく、まだ気になるのだけど、ひつやり俺は食欲のほうが

上回ったりしへんのまが隠れたりとした。

夜。

始業式からスーパーに立ち寄った後のことだ。

家に帰った俺は早急に毎食を作つては食べて後は怠惰に過ぎした。

ちなみに怠惰と悪くは言つたものの、漫画を読んだりゲームをやつたりと健全な男子高校生としては普通のことだ。

楽しいことをやつていると時刻どこののはあつとこつまで過ぎるもので、気付けば夕食の時間。

あまりやる気も起きなかつたのでスーパーで安かつたから買つておいた焼きそばを作つては食べた。

さて、現在は夜中。

コンビニに来ている。

何故、コンビニなのか？

それは、深い事情……などなく単純なことだ。

風呂上りに飲むはずだつた牛乳の消費期限が切れていたからだ。別段、1日ぐらいならなんとかなると考える人物もいるだらう。

だが俺は違う。

昔、消費期限が一週間も過ぎた牛乳を飲んでから誓つたのだ。消費期限ないし賞味期限が切れた食品には一切手を出さないと

いや、別に誇れることではないのだが。

そうして俺はコンビニで牛乳と適当にお菓子を買つては帰宅する。

そこまではいい。

問題は帰宅後だ。

自宅にて俺は鍵を取り出し、開けるつもりだった。だが、開かない。

もう一度、鍵を使う。

今度は開いた。

本来ならここで鍵を掛け忘れたというオチだらう。けど、俺は確かに鍵を掛けたのを覚えている。

なら、何故？

答えは明白だ。

俺以外の誰か鍵を開けたのだ。

「つ……！？」

嫌な汗が頬を伝う。

両親は今、出張中だ。いるはずがない。

ご近所の人。

勝手に入るわけがない。

友人や知り合い。

久瀬や美春ならやりそつだが、合鍵などを渡した覚えはない。

窓を巢。

「やつぱつ……やつだよなあ……」

このときの俺はどうかしていた。

人間、焦ると冷静な思考ができなくなるものだ。

ポケットには携帯があるものの警察に連絡という手段が選択肢からはずっていたのだ。

俺はそのまま、中の窓を巢に気付かれないように家へと入る。

自分で解決しようつと思考してしまったからだ。

武器とこ「武器はない。

せいぜい、玄関においてある靴べら程度だ。けど、ないよつマシだった。

靴を脱いでは忍び足でまず廊下に出る。

異常なし。

まるで俺が空き巣のようだ。

そんなとき物音が聞こえた。

居間からだ。

緊張のあまり自身の心臓の鼓動が伝わる。チャンスは一回きりだろう。

相手が気付かないうちに奇襲をかけて捕まる。

はー、と深呼吸をしてはゆっくりと廊下を渡り居間の前。

誰かいる。

靴べらを上段へと構えた。

まずはイメージだ。

相手へどのように奇襲をかけては、倒すのかを

すぐに居間へと突撃し靴べらを上段から叩きのめす。

相手が驚き動搖している最中に蹴りや拳で問答無用で打ち倒す。  
俺は空き巣を倒すイメージをする。

イメージだが、するのとしないのでは明らかに違つ。

相手に気付かれないように一息。  
足音が聞こえた。

近い。

絶好のチャンスだ。

俺は決意を決める。

そのまま、大声とともに突入する。

「つ……そこまでだ！……」  
「！？」

思つていた以上に大きな声が出た。  
だが、それでいい。

気付かれていない状況でなら大声は相手を予想以上に驚かせる。  
結果、相手は動きを見せない。

これ以上とないチャンス。

思ったより相手が小さかった。

少なくとも俺以上の背だと思っていたが、まるで中学生だ。

少しばかり拍子抜け。

だが、勢いが強すぎて止まらない。

俺はそのまま両手で握った靴べらを力一杯相手へと振り下ろす。

それは相手を叩く……はずだった。

スッ…と一瞬、何かが閃く。

一瞬だつたからよくわからない。

それに遅れてカラーンと言う乾いた音が聞こえた。

つい、視線を向けてしまう。

「え……？」

それは、靴べら……の先端だった。

気付けば俺が持っている靴べらは一つに分かれていた。

切り口は鮮やかともいえるほど綺麗に斜めに斬っていた。

まるで達人が斬ったようだ。

すると、チャキッと金属音が聞こえる。

視線を向ける。

部屋は暗くて相手がよく見えないのだが黒いロープを着ているの

が理解できた。

昼間に会つたあのロープの少女を思い出してしまつ。

部屋には微かに月なのか街灯かは知らないが明かりが差し掛かっている。

その明かりを反射するように日本刀の刃が怪しげに輝いていた。

日本刀？

「あ、う……」

まともに声が出せない。

俺は刀の恐怖からか数歩下がつては腰を抜かして尻餅をうつてしまつ。

するとロープの人物は数歩、俺へと近づいては刀を構えなおす。突きを穿つ構えだ。

そんな中、俺はある言葉を思い出してしまつた。  
それは朝……登校のときに

『ふん、だ！ 先輩なんて辻斬りに合えばいいんです』

合つた……合つたよ！

なんだよ、美春の言つたことが現実になつちゃつたよ！？  
エスパーか？ 超能力者（レベル5）か！？

いかん、変な思考が混じつてしまつた。  
冷静に見つめ直す。

俺は腰を抜かして立ち上がることがままならない。  
対して、相手は突きの構え。

……詰みだ。

そんなときロープの人物は優しげな口調でつぶやいた。

「大丈夫だよ。死神のあたしがすぐに成仏させてあげる」

言っている言葉の意味は理解できなかつた。

けど、透き通るような綺麗な声は確かに聞き覚えがある。

それは、確かに昼間に会つた少女の声だ。

けど、それ以上思考する猶予はもらえなかつた。

瞬間

俺の胸に日本刀が突き刺さつた。

目の前は真っ暗だつた。

まるで深い……深い……光さえ届かない海。

ただ暗闇へと墮ちていいく。

体の自由はなく感覚もない。

ただ覚えているのは自身の胸に刺さつた日本刀だ。

ならわかる。

俺は殺されたのだ。

これが 死なのか？

呆氣ないものだ。

悲しくは……ない。

けれど後悔はある。

ただ、もうちょっとだけ生きていたかったと  
死ぬとわかつていたならもうちょっとだけでも平凡な日常を堪能  
しておきたかった。

だから、強く思つてしまつ。

死にたくない……と

けれど、叶えられるはずもないと理解していた。  
だから抵抗を止めて身をゆだねる。

けれど、少しばかり後悔を残して。

そのまま俺は意識を自身の深い闇へと沈めていった。

「はっ！？」

気が付けば知らない天井……な、わけはなく見に覚えのある天井  
だった。

自宅それも居間の天井だ。

え……居間の天井？

「なんでだ？」

ふと、疑問に思つ。

俺は殺されたはずだった。

ならば、自宅の居間で田覚めるはずはない。  
それはつまり死んで生き返つたこととなるのだから。

ふと、俺は刺されたはずの胸を見る。

けれど

「傷が……ない？」

そうなのだ。

刺されたのなら傷があるはず。

それどころか血の跡すらないのだ。

服は元のままだし服の胸の部分には小さな切れ目ができているだけだった。

まるで日本刀で貫通させたような……。

けれど身体には傷がないのだ。  
どうしたことだ？

俺は考えた。

けれど考え付かなかつた。

何故、こうなった理由を  
だから俺は一つの結論に達した。

「そうか　夢、だつたのか」

夢とは都合のいい言葉だ。

理解しきれず、おぼろげにしか覚えていなのならそれは全て夢で  
片付けられるのだ。

だから俺もそう思い込むことにしてやつとした。  
だといつのに俺の願望虚しく奴は突然やつてきた。

「あー、やつと起きたー。」

## 子供のよくな声。

振り向けば黒い……ローブを着た……人物！？  
しかもその左手には鞘に収めているものの日本刀らしき物まであるのだ。

絶叫。

俺は腰を抜かしたような体勢のまま人とはありえない速さで壁まで下がる。

だって仕方ないだろう。

夢か現実かは知らないが俺を殺した人物が突如目の前に現れたのだから。

けれど、ローブの人物はそんな俺を見てはまるで傷ついたような口調だった。

「もっ、ひっどいなあー。おぬでおばけ扱いだよー」

いえ、おばけではなく辻斬りです。  
とツツコミたくなつたが声もうまくでない。

俺ができるのは怯えるだけだった。

すると、ローブの人物は俺へとゆっくりと近づいてくる。殺さないでくれと言いたいのだが喉の奥が聞えて声が出ない。

一步。

また一步。

そして刀の間合いへと入る。

そんな時、俺の恐怖は絶頂を向かえた。

喉の問えがどれ、声が出るよつになつた。

「お、俺を殺すのか？」

命乞いではなく疑問形で問いつてしまつ。

慌てるとそんな簡単なことさせできなくなつてしまつのだ。

けれど、そんな疑問は疑問で返されてしまつた。

「殺す？ なんで？」

「え……？」

呆気に取られる。

意味が理解できない。

確かにコイツは俺の胸をその日本刀で刺したはずだ。  
殺すといつ理由がなければそんなことはしない。

「なら、お前は一体何者なんだよ……？」

第一の疑問を問う。

俺を殺す目的でないのなら、その正体も不明。

ならその正体を問うのは当然のことだ。

「正体？ んー、人に言つのはちよつとまざいんだけどなー」

迷うような素振り。

人に言つのはまざい？

ほんと意味不明だ。  
わけがわからない。

「けど……事情が事情だし、特別に教えてあげるね」

すると、ローブの頭の部分を下ろした。

そこには一人の少女の素顔が見えた。

日本人離れした銀色の髪がなびく。  
瞳も日本人には到底思えない赤い色。

いや、日本人ではなくもはや人間離れと言つてしまつても過言で  
はない。

一言で言えば綺麗。

けれどその綺麗という度合いも人という範疇を超えているような  
気がする。

そんな中、少女は問い合わせた。

「あたしは死を司る者。その名も死神です」

「死神……だと？」

正直言つて信じがたかった。

なにせ俺は生まれたから16年間、一度として死神などと会つたことはないからだ。

否。

会つはずがない。  
存在するはずがない。

死神と名乗るのは全て自称。

だといつのに、俺は田の前の少女をわずかにも死神だと思つてしまつた。

何故だ？

まずは見た目だ。

日本人として生きて今までみたことのない銀髪。  
黒とか茶色が混じつているのが普通だらう。  
なのに銀色に髪。

さらには赤い瞳だ。

美しく思えるのだが、その色はまるで血の色だ。

人間離れ。

そんなフレーズが俺の脳内で流された。  
だから俺は彼女を死神として認めるここに……

「つて、できるかいっ！？」

「うひやー！？」

叫ぶ。

もし、ここに卓袱台があれば勢いでひっくり返していくだらう。

不覚にも信じてしまいそうになつた。

見た目に騙されるな。

銀髪だつて髪もあるし、今となれば簡単に染めることも可能。  
瞳だつてカラー・コンタクトがあるだらう。

だから俺は言つ。

「……信じられるか

「え？」

死神を名乗る少女は今の中が聞き取れなかつたのか首をかしげる。  
だから、俺はもう一度言つ。

「信じられるか。死神なんて架空の存在なんてあつていいはずがないだろ！」

少し強めに叫ぶよつて言つ。

すると少女は頬を膨らませる。  
怒っているのがわかる。

「そ、そんなことないよ！ れっきとした死神だもん！」

反発の言葉。

少しばかり不快に感じた。

だからひでこひでこ、俺はひでこひでこした。

……いや、してしまった。

「なら、自分が死神つて証明してみるー。  
む……」

少女が頬を強張らせる。

無理だ……と俺は思った。  
だつて、そうだつ。

架空の存在の証明だ。

それを納得させるのに何をすればいい？

答えなどない。

俺はそつ思つていた。

けれど少女は違つた。

「わかったよ。じゃあ、証明できたら信じてよね」

今なお顔は強張った状態で言った。

何をする？

信じられないながらも、ちょっとだけ少女の行動が気になってしまつ。

もし、死神と証明できるようなことがあるのだったら何だひつ？

心の片隅ではそのような疑問が浮かぶ。

すると、少女は自身の刀を鞘に収めている状態のまま両手で上段へと構えた。

そして軽く振り下ろす。

ガンッ

「グアッ！？」

そして俺の頭に命中。

刀はまるで本物のような重みだった。

実質、小突いただけだろう。  
けれど痛い。

俺は数歩後ろへとよろめく。

痛みでなつか感覺がおかしくなったのか浮遊感を感じる。  
そのまま、背後でドサッと音が聞こえた。  
なにかが落ちたり、倒れたような音だ。

後ろを確認する。

『なんだ……？』

人だ。

それも高校生ぐらいの男性が倒れていた。

だが、その姿には見覚えがあった。

男性としては少し長いかもしれない髪。  
水森高校の制服。

それは鏡で毎回、顔を合わせる存在。  
すなわち俺自身だった。

『つて……俺が倒れてるッ！？』

なら、今の俺はなんだ。  
自身の手を見る。

なんだか透けて見えた。

「ほら、証明だよ」

『な……なにをしたんだ？』

今、この状況が理解できない。  
けれど少女は何か得意げな感じだった。

「んーとねー、肉体から魂が抜けたんだよー

少女が軽い口調で言つ。

不可解だ。

けれど、何気なく辻褄が合つてしまつ。

そこに倒れているのは正真正銘の俺で抜け殻だ。  
そして、今の俺は肉体を持たない俺。

そう考へると今、倒れている自分自身の証明がいく  
いや、それつてもしかして……。

『俺つて……死んだのか？』  
「んー、そうだねー」

少女がうなづく。

やはり。

あくまで俺のイメージだが、肉体から魂が離れるのを死という状  
態だと俺は思つてゐる。

なら、この状況は直球で死だと言えてしまつだらう。

『つて、死んだあ！？』

その現実を理解した俺は思いつきり叫んでしまつたのだった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0390y/>

---

橋くん家の死神ちゃん

2011年11月4日21時25分発行